

## 線の上に線を —— 映画と境界

田中竜輔 (季刊『nobody』編集長)

**他**なるものを分別する指標としての「線」があり、他なるものの接触それ自体の痕跡としての「線」がある。前者がある他性をアクティブに生み出すための方法であるとすれば、後者は特定の関係の中にパッシヴに顕現した他性の徴であると言えるだろうか。いずれにせよそれら「線」は往々にして、ある固有の場や事柄の当事者たちのものではなく、その外部によって暴力的に生み出され、あるいは恣意的に見出されるものだ。それはときに法や規則や慣習と呼ばれるものと密接に結び付いた壁のごとく、その地に生きる人々に深い影を落とすことになるだろう。

そのような「線」に対峙することを選択したならば、「映画」もまた必然として、自らもまた「線」を生み出す／見出す主体だという事態に直面するはずだ。任意の人や場所や事柄にカメラを向けることは、意識的か否かを問わず、世界という他性に対し「線」を生み出す／見出す力能にほかならない。ひとつのショット（あるいはモンタージュ）とは、愛であるとともに憎悪であり、友情であるとともに敵意であるような「線」である。すでに世界に張り巡らされた強固な「線」どもの拘束を揺るがすための、新たな「線」の引き方にこそ、優れた映画作家たちの仕事はある。

自国であるタイ国内の闘争と、カンボジアとの国境紛争が頻発するシーサケート県を中心的な舞台とした、ノンタワット・ナムベンジャボンの『空低く 大地高し』では、日常に埋没した無数の「線」とその地に生きる人々との秘められた関係が、カメラという補助線に掘り起こされることで映し出される。現実を記録するだけの無害で非人称なまなざしではなく、あらゆる事象に影響を及ぼす主体としてのカメラがそこにある。浴びせかけられた水という暴力がカメラの境界面を露呈させる印象的なシークエンスには、その裏返しに構図が記しづけてもいるだろう。いささか自虐めいてはいるが、しかしそのシークエンスに

映り込む人々の視線と映画のまなざしは、決して無縁なものではない。

『庭園に入れば』における、イスラエル生まれの監督アヴィ・モグラビとパレスティナ人教師アリの「友情」、それに対する異人種間に生まれた少女の語る自らの心＝身をめぐる「引き裂かれ」は、かつての幸福な共同体の在り処をめぐるこの旅が、少女にとっては「線」の堅牢さを確かめさせるものであることを残酷にも示しているだろう。しかしながらその中で、決定的な第三者であるフランス人撮影監督とこの少女が車中で交わすたわいもない会話のシーンには、アヴィとアリの友情とは別種の親密さを見ることが出来る。カメラの前で自分自身を演じようとする少女の姿は、同じくカメラの前で失われた過去を見つめようとする男たちの姿に重なり合い、この地を巡るそれぞれの探求が、決して孤独な営みではないことを映し出しているはずだ。

季節風の影響で毎年のように流れを変えてしまう大河ガンジス、インドとバングラデシュ国境付近の中洲に住む人々を被写体とした『チョール 国境の沈む島』。決して自分たちの思う通りにはならない大河を制御することの代わりに、法が、慣習が、そして家族が、人々を締め付け閉塞させることで、この地の仮初の調和は保たれているようだ。制御不能なガンジスの流れは、たしかにこの地域の過酷な生活の原因ではあるのだろう。監督であるソーラヴ・サーランギは、様々な事由や状況に縛り付けられたひとりの少年をこのフィルムを中心人物とし、その彼が嵐の中、怖気づくこともなくガンジスの濁流に舟を浮かべる姿にカメラを向ける。「大河＝線」の変容のダイナミズムに、新たな「線」を重ねるような運動こそが、この地域の閉塞を打ち破る術であるかのように。

### ■上映

『空低く 大地高し』【IC】 ..... 10/11 12:45- [A6] | 10/13 10:00- [CL]

『庭園に入れば』【IC】 ..... 10/12 13:45- [A6] | 10/13 15:30- [CL]

『チョール 国境の沈む島』【IC】 ..... 10/11 15:00- [CL] | 10/13 19:00- [A6]